慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『近代日本研究』第四巻発刊のことば
Sub Title	
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1987
Jtitle	近代日本研究 Vol.4, (1987.) ,p.i- ii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	福澤門下生特集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19870000--003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『近代日本研究』第四巻発刊のことば

「慶應義塾福澤研究センター」には前史がある。それを「塾史資料室」に読むことが、組織的には正しいだろう。だが、私はあえてそのようには考えない。というのは『慶應義塾百年史』編纂の過程で、あまりにも塾卒業生の活動軌跡が、著名人にかたよっている事実を確認されていた先輩たちが、近代日本建設の礎として、地方で奮闘した卒業生の事跡を発掘しておかねばならぬことを痛感されたその心事が余りにも重大であるからである。

その中心になられたのが、河北展生君（当時文学部教授）であった。もちろん、中井信彦君（当時文学部教授）のお名前を落すことはできない。このお二人を核にして結集したのが石坂巌（当時商学部教授）・高鳥正夫（当時法学部教授）君であり、飯田鼎（経済学部教授）、西川俊作（商学部教授）、坂井達朗（文学部教授）、小野修三（商学部助教授）、佐志傳（高等学校教諭）、松崎欣一（志木高等学校教諭）、高木不二（高等学校教諭）、丸山信（福澤研究センター事務長付）、の諸君、そして私であった。

この発掘作業には一貫して「福澤諭吉記念慶應義塾学事振興資金」による研究補助が与えられた。しかし、ほぼ一世紀前にさかのぼる人物の存在確認すらたいへんな作業である。またフィールドワークに塾達した諸君がいる一方で、私のようにまったくの素人もいる。それでも、各地での出張調査を重ねてゆくうちに、手がかりが見えてきた。松崎君が丁寧に復刊された『森田勝之助日記』（『福澤研究センター資料（一）』）は、こうした作業と「センター」という組織的受皿があったればこその実現であったはずである。

さらに、「肥後実学党と初期の慶應義塾」（一）（坂井達朗）、「会社・同社そして社中」（佐志傳）、「和歌山県民権

家児玉仲児と慶應義塾」（高木不二）、「三井工業部における慶應義塾卒業生の動向」（武内成）などはすべて、この発掘作業の明確な跡を示している。

この巻は、こうした実績の上に立って、中間的な報告集として発刊される。「センター」に直接かかわりをもっておられないにもかかわらず、蘊蓄を傾けていただいた、森征一法学部助教授、昆野和七君、ならびに「大村史談会」の稲田淳氏に心からの謝意を表したい。

私たちはこの機会を一つの発条として、さらに調査を進める。よしそれが、報告や論文にはならない程度の事実確認であっても、私たちの先輩がそれぞれに、時代と地域の中で苦闘された跡として大切にしなければならない責務を思う。

わが「センター」は、福澤および義塾に「埋没せず、逸脱せず」のぎりぎりの批判精神の心事によってたっている。その心事はついに福澤をこえ義塾をこえるところで相渉ることを必然としなければならぬ。『近代日本研究』はその意味で、わが砦であると同時に、立て籠る閉じた梁山泊になるわけにはゆかない。それは福澤が、

「我輩の職務は、今日この世に居り我輩の生々したる痕跡を遺して、遠くこれを後世子孫に伝うるの一事に在り。その任また重しと言うべし」（『学問のすすめ』九編）

としたレーゾン・デタを真率にだが発展的に継承することを意味する。

なすべきことはあまりに多い。近代日本は学ばなければならない。そのための「センター」でなければならず、そのための『近代日本研究』でなければならぬ。みずからの率先は福澤の精神であった。

一九八七年一二月

慶應義塾福澤研究センター
副所長　内　山　秀　夫